関ヶ原軍記 三編 十三 十四

へ遠13
2207
37

門へ遠13
帙2207
巻37
特

牛込本
池清

関ヶ原軍記三編巻之拾三

目録

一 井伊直政一番合戰手極める事
并金吾秀秋
山の討人死
命ぜらるる事
一 家康公御陣営に於て諸侯
地出餐意の事

徳川十五代記 編 春雨文庫 編 敵討無野權三代記 全部十五冊
近世記聞 編 明治太平記 全
開明小説 鳥追於松實録 十五 大尾
珍説 夜嵐實記 全 松村春輔著
近世 櫻田實録 全 参考肥長 鹿兒嶋士傳 編
此書たるや出軍士卒の日記或は戰地より歸京せし探偵人等の説話を因り西國誌討の顛末を詳細なる第一の實録なり
近世小倉青木實記 全部 近日出来
這は德川家の旗本青木弥太郎小倉藩長崎唱妓眼八等春情十事奇暴借強談の悪事を綴りたれば近世の珍書なり
書物繪入 貸本所 東京牛込細工町 誠光堂 池田屋清吉謹白

并手柏俗本多つの事

牛込 池清

福田文庫

関ケ原軍記三篇卷之拾二

井伊直政一書合戦せし拾ひる事

御目見後和

并重臣考状

命せらるる事

山の討人を

去程ふ今新関ケ原手ふるく

寺書合戦せ〳〵者ども来り雑ども

宮〳〵に福島左衛門大夫の手へ

一戸先手なれば青合我と郡
なるべんと思ひ井伊
兵部少輔直政と云へる福源
正則の例を思ひ
中なるい福源度の思ひ百先遠
慮これ秋山兵衛尉鹿忠て
今日不斗勝ひとたび中
ひとりいんぎんなる時よ

源石は正則を井伊の陣暑有
為さるくいやくく
ざる事これは野合はこうひと
彼と中こと及ばず敵有元
弁項秀橋秋弁ふこそ写く
いくへと言は直政のいとく糸け
なる此心入もてこれ徳ふびそる
は青ぐん合戦を事くく

以来佐竹義宣ハ
を福島正則ハ
屋けやハ師せやや及ぶ
いハ者今日の合戦
直政ハ御横ハ
も佐竹代官も
を大ひ感ぜ
て今日ハ戦ひ

ん〳〵もその功
弱弱雷雨代
ハまくざハ
ゝり

早くも佐竹方
師出さるハ
ゝ孔目録ハ
家康ハ尺

と御詫ぶ
郎ハ博ハ雷敬
ハ時ハ
ハ働ハ
ハ働き
ハ彼

の幸福を意味り追討軍
均しく軍功賞ともの
ぶるり時を抜ぬるを
帰解らるに付ては幸福
を抜出り敵又此度金吾中
納言秀秋を以て先陣
軍長石見守
その外小性三四人ばかりにて

陣礼中に付
内府公を陣所にまねき
金吾及ともに招請あるべく
今日の陣働無双の合
力有しゆへ勝利を得り是
は江戸　中納言同前にぞんぜ
ばと　帰せらる金吾どのは
早速石田がふれ礼を遣ひ

内府公は云雄云ける紀伊国せ
ゝ者ども也中と数今日の戦
ひいぞんじ仕ぬ
ゝ合見苦しく山潟左の長
佐和山の城ゝ石田ゞ意大勢
ゝ長ゝ
むり矢むひ
郎ひゝり

御意地蒙
ゝ退討ゝ

内府公御一人の長年人
ゝ〻ゝ〻ゝ南ゝて
出立ゝ方ゝ急ぐ佐和山へ取詰
られ〻〻〻搦手ゝ田中兵部大夫
矢向ゝるべしゝ
上ゝゝ
ゝの七ゝ杉木新坂　秋月筑
めん〻ゝ佐礼海で

信州山北援陣に向うべしと
のぶつゆ之又稲葉伊豫入道一鉄に
援しなが元吹うして浦孔を中しる
その頃平山遠州大垣の城をも
攻落さべきもの水攻平
作なるを也浦合北法大將
大垣城をば攻援り彼く十
日もそや暮く及ぶ夜子

川の麓山中村に
城居へ〳〵の大谷が山陰までの
陣屋城幸ひ平てんくんして
入りの強平吉隆が智ゆう
強うを有るや此一戦早りて
関屋公必ばの所く陣
うの屋よりと思ひしら
道城掃除して一隠居を構へ

御本陣

一枚紙に一帝様のをれを出て
その中に一ト書あり見い天下
一枚より始まる此程ちんら
関屋公光を思ひ
く深く大谷をばかもせひ
しとそ彼くを立来りて聖の
山を洗ふが如し一枚大なる紙
野陣とそりて小屋張りけ蔵

ゑを立家に立入るこの世間法使
書法手を弱りて今晩之粮
地獄に楚ゆ心ばせ合用なり
又生来ても吟屋ばし
蕎麦来みて食べしとわ
解られ人大ひふ富
なるとい
布おゆる手殺生殺生は役ぞん地
御下知慶しき

りく迎四郎川を見せしめ
ぬる年一日の死人山野に満て
大面故を血とぐ〳〵川へ流
く紅を流すごとし陣中
大軍集るゆゑ井戸わきつくぶ
大きゝ川水を汲んでやうを
樽べまちりと
血のあるまて樽腹を人の板

井に入べきるべきるものの
沙遠意之郡のごとくれば
義時くゝ丸をぺん玉く
むゝくの井戸れ水ぢくゝて
合粮ぢくゝ
内府公の沙智徳ぢ感じまる
この若御義年の時より刈ケ根
のゝるゆいゝ有〳〵と

家康公陣営に於て秋信長
城に会意のこゝろ
兼て様体大事つのゝ
曰く　東照宮中山平に出張
此節信長を　百出さんく
出相語りと　山酒
城下さんに　信士城廟
又立節
城責落し　その後関ヶ原
合戦の落忘　向屋け本巻
後柳川平陣　又鴻津無
庫以義弘を大坂へ退き義博
て　内府公と戦うん
り　毛利輝元不同ん有人賀
城大集ひ　本巻薩刑廟児

鴻巣陣中斬首結和山城
をせめ落城の後軍をとゝめ故陣場
ゆるさるゝ所に敵陣より来る
剃さん大軍攻来るを聞て上田
衆幸村下知して武千余人
勢揃しける
元書あるゝ功あつ事
賞る紀時古年まれ

病るゝ所元を戦ひ
手柄一匹夫の働先年
武者もその恩賞部
その一つ大なる
人も同じ事なりそ
まゝ其賞或ひ褒美
まても人の議より
の理なり必ず賞

ばくばく軍功の賞を財い
大きまくれつれくいの
ぐみ来り働きみぶる事
服装るり凡そ戦ひ縁
利まるい武士斗りもも限
ふべくばく生何程稼き
人まるる事るり今れ
ふみも下人銭百仕る人

ひるひるる大笑るるの財ム強
く働事くるりの者く寝笑
と者ども時い主ねての働き
いるく稼るり又高人
手代銭くるる紀童銀城
まくけくる主人り源ぞく
銭まる仕くりと斗りいて
秋物ぞる時る中る切ん

する事とはいはんかしてもそこの責をおもはるべき事なり君を思ふ事は古語のごとく凡人猶亦為こ斗り事なる付て人利益て生涯用ふるに堪たり漢の高祖天下を保てる事

只偏へ千責を与へ功を形なる理なりされば事に雷剛敏の頂羽も天下を失なるに堪たる事を人千与へざるゆへつゐに千て天下をとる事なり形事服前なり只生人の働なと責をべしと思ふ時

一メ文字ハ百年
せんとおもひ或百
年ハ苦しうとおもひ
又其果ハいやく主ねて
ゆくせんとおもひて竜角
いづ逆ゆ諸をせんぐて其車
東西南北

寛ケ原十八日の戰ひ九州海
内の大名ぶんぶん天下
一統のしるしを変ぜ
ちりいぬぶ大坂の城ハ毛
毛利博田氏逆徒あり内
敵充満する中へ此城又いる
るいくさ多くも知ぶ
徒大将もこれ形貴と震

とりて大甚一條へのうちより
家老書頭哉ハ勝れたく
ありつれたる者共ぞ今
此豊臣なる時ハかれにも
こころ千金けるなき事千
只も主手ていよく御哉
諸きりの大名浦山しく
おのひて随分軍忠哉抽ん

出んとするも理ありその功
むなしき時ハたくねくいかも
事無きの利なり平生此人
をそても何なと御くとらへ
とも主人の目か明ぬと何度
も抜かりに趣事公せる此理
ありて振くなけなくも
忠忠文を中山御殿ありて

信長を食意なべし迚
俄に百出されたり是全く
武備なきもの驚入
故るの理なり御手元人の
及ばざるところにして実に
東照宮の御思意ふかく
軍法手本叶ひし之れも
神妙の　御名誉なり

誉〳〵信長人の感じ奉るも
忘れ難きなり

家康公中山手
御出馬なる
御遍留有て
十六日なる御陣営ありて
信長手御酒を下されべき
なり其人別き福島
正則乃家人大海雲蔵　吉村

又右衛門　可児才蔵　福島伯耆
守目録ヲ受ケ皆手負ひ代ヲ悔ル
池田輝政の家来建部内匠
助の伝次所右衛門　池田丹波
守目録ヲ受ケ
蜂屋孝右ヶ家人長田大隅
滝野常刀　長堂弓虎ヶ家人
長堂仁右衛門　腕を切下げられて同じく
目録の下さる
野七郎　ごくみの長田長政の家来

坂長又左衛　細川忠興の家人
長岡常刀　手柄大名の侍下
等ひ手井伊　本多　榊原　本代
侍彼是武辺の達者九そ二拾
人手負ひ　此度の御厩の御厩
お並んで御料理酒未だ以
載せ小姓衆達　式人〻を見て
大ひ手等ひ今日代御陣中

よいは鷹そ手所輝のをめ
集めのひて　御使ひ方
ちうん拾ひ方　ちりやそれく
化物の集りてるごとくこと
目引神引第ひ手地
内府公情愛あつく御機げん
大ひ手拾ひ　もつての外なる
第者共ゞ手代ゞ彼者共を

義を財ゝ手無ゝし大会社力者
手ゝ海ゞ手より遥ゝ寄羅加
の方ゝと金ゝ度ゝ軍手
お働き手頂ゝく今ハ所輝と
拾ゝり海ぢゝが第ひゝ小者
くゝ何ゞ第ひゝも今氏
家康ゞ為ゝ地走せる密人を
拾ゝ拾ゝ拾ゝ第るべゝ

らんぢ
ゑりてもけりぐる事きるよ
不審ものるすりそはしり有く
何様ぞ又様ゝる作物之も
御笑ひ様ぐる花も此間
無病ものの後度又之御一人
なり出来
神君の度堂
る所以　百年に此序年きぐ度ぐ

家来手柱俄大傷つをも出さ
きゝ人と之言虎罠つて子く
百出年寄り御膳城ゑり
此時の　人意年なんぢ
形骨と表ひ　有義手代者
本皆ゝ紀御きして
家康ゲ物利の幸福御ぢゝぐ
主人の言名同じく自分く

の武者振おこり扇を
是手にとり見も狂又忠義地
色黒べーとの手そなのく
有題くに帰嘉せり時に素性の
渡辺天満宮俄たつをみあく点今
代
上意に和しごと紀者の
色度うつうつ及ぶる事そ
はいとそみも合戦さしまいば

自分大代御奉を付るまで手は
以方いの御名を忘れるくは奉公
来方根加る云ひ御奉を
加りぐくいもやるに参り
別して四度親子記り言り
結城俄たる事つはたりの手代も
より切腹されたの迄一布まで
末生涯あり

家康公の

内陣中にて於る様目あり事
法師の働きの次第を委しく
申すべきの仕先事つゞ
手柄の事も御存知なり去べ
き海辺猟をも切り廻らく
来る廿五日に出さるゝ和田海
川の戦ひ手負堂宮鳳彩骨
城震る程も良ねこ此時海辺仕

方場つゝ小弼げ云と組で貫や討
手左り此手を海のところを源
く切れたりたるひ孫りく
赤坂の岩手陣せ嘆京り
いりて手負ひ坂廣治せん
と聖張道林とい和料医師を
拍く此医師も知りて上手こしゞ
海辺げ麻布を篤方尺く此麻布

とても服所にて急死あるべき
年金にて親に此病をさせて
よりてうるべき
所なるも癌腫脹ありて別
金なし此底なきそこい死きべし
といへ時年俸集つ呼くこの
所腫ゆべきを書引しく
良時に切腹しけりのこと

法人も生雪所敬り打ぐ腫く
腫り癌腫して年金腫く
る虎大きく感じて見物組
三十人地獄けに二百石加増して
六百石を賜る此腫を
来思変嘆して百て大雪剛なる
毒ものの乳と御養育て
刎ちたるも
百出さんとり

慶長年大坂陣の時元和辺迄
有来りの仮書と勅令武家諸法人
参考しるす細有て慶長人
名先元和元年勅令するところ

池清

関ヶ原軍記三編巻の十三終

池清

池清

関ヶ原軍記三編巻之拾四

目録

一立花宗茂大津の城を攻撃事
并毛利津義弘武雪紙帰国の事
一義弘少将病の事
并佐和山義弘上洛東雲寺弊所
の事

池清

関ケ原軍記三編巻之拾四

立花宗茂大津の城を攻撃事
并鴻津義弘武勇絶倫を顕り
て帰国の事

宗茂筑後の國柳川の城主なる
立花左近将監宗茂は武勇大
なり大友家の末流にして

高槻下総守高宮を籠城の間
立花山へ長城城して立花城名
高々なが出せり門は柳門より長城
せり城る中出さんびに石田三成が
丸より秀頼が出馬ぞうりを
はく宮ケ原へ出張せんと江州
草津に陣二千余騎此軍
高城より宮方と吹合せる

十九日大津の
城を京極高次宮東の四時方
にて大津の城へ攻掛る
子細を高次一度大谷吉隆
と同陣して小西へいで夫より
宮ケ原へ後へ長崎なりしに
江州勢ども一番しく
その翌日寅時

冥ケ原へい出ぜ十ちに淀津へ出
く海津よりふまよのり大津へ
ゆりて彩博せうりこれ九月廿日也
これより彩宮と接へ京町三
井寺 芦川おの橋こに柵城法
法師く家人城分配して大津
松本 冥ちへんまで民家城焼
ちちひ関東の味方ちつく

彩をしるこの時立義方を招賢
ち淀多よ有しげこの体を見
ていこそ弱弱ほ城で十大坂
淀を廃 返言次第さこく
せあ淀を べし 家宮ケちこく
いでこりそもこの大津を
敵手更ていえ組仕ちべしゆく
ちへむこのむと考彩の母堂

淀どの〳〵淀殿
さきの内室千代姫なれど
毛利輝元さきの三家相続
吳見〳〵おのゝ〳〵方
うつゝ吉川廣家をそゝのかし
て秀頼の味方をすゝめ
松原 毛利 石川 藤堂 上野
久留米 南条等なるその外七組の

うち伊達丹後守 遠州甲斐守
郡主殿頭 金森法印 大津の城の遠方
へ向つかる樋口 立花左近将監武多五百余人
手てせめ寄せるこれより結手
一同〳〵責立るとゝいへ共城郭は
きゝとゞく堅固なりまりく立花

家義大ひらいらの城廓
ざる時を実ケ原共一戦す宮と
城るより大坂方の手ぬる紀よ
いらるべしとて二手あ百
余人京町口へ攻寄る豊秋
城内にて十一日やで虎口をち
ぞんじて打立るにこの由
きゝ及きぞしく城中へ入るこの

豊臣家より名士が早打いめんく
これ縄手を紀を至て手縄員玉
等りを迎あて打こる手色
しらくつれて豊臣一手まて
京町口をせめ中より結手手
きゝ紀秀でこり見ふ伝く
妙城抱へくそく家人黒
岡何兵衛逆んして扱ひを入色

大津の城を立給ふ事
次に高野山へ上りぞ給ひ
九月十四日より既に十八日迄ケ
原合戦　御勝利日後三年に
り　御陣の時京極高次
礼をやる義本陣を下さる此
時　内府公乃作せる今
一日橋へ近ぢの通り遠

ゆる義手柄新
ぞ　作せられる板又橋津無
庫頭義弘に関ケ原より撤例
関の地蔵町中を新橋し
食こ有なんとしるに実ケ
原のうちに石田ぐる破れる
とき町中ものども
雑破や新橋の名先来るべし

とて家紋鶴蓋すぐも隠し
そうぐ〳〵廉伏危谷へ抜け
けるを〳〵時家るうりつく海津
勢もそ飛るく鈴鹿峠にて
休息するに弥兵衛来りて人百余
人屯しるなづこの体をてを
るつもとて武者走り
とり牛二さをはりあれば

大勢寄り合て打数〳〵その
皮をるを〳〵ふ厩〳〵を肉喰
して大きにちをはり
るぶんをてはをもも
尾〳〵逆矢切鉄を大津〳〵
つて大将義信を立花宗茂り
討面して実ケ原北戦ひ姫路
城をる宗茂吟大ひふ怒り

これをもって手重なるべき切
手後詰の役小なりそれゆえ
逆上京し美濃狭山を抜く
攻めべしそして京都へ出る
鴻津に大坂手すりく淀急橋
手陣し堀中へ入まち
さてもこの京の戦ひの味方
破まく信大将の家方より来

れ敗ぐく軍い
なり山崎方ぶこれまで家臣
とかりうこの上を来り先
陣仕ん又一方を立花左近
将監お働くべし石田を津
こん手陣を立
徳川度の上洛お待快く
一戦をべき形りいを紀伊元長

盤おりて出陣すべしと
のりて送る陣中にて毛利輝
元 信岡長慶 其外名将を加
のせんくも宗合戦数軍
を出さく十方とうるひ大
きにうろたへ危角の逆
る人なり是をもつて義
弘大ひに板立一板を高聳

なき猶掘けども郎ろう
形紀奴系に前稜してむざ骨
折りうち級るばかりべき板
ろうばれとして大坂城中に入
る秋人質をとるぞひとり
云紀伊元宗さく播州姫路の
津牛窓明苅 下代宮 瀬戸
内を城へくちくの毛軍

城をぞ思ひ出ぬと海にこそ
おもへ〳〵ゑにあらく本国へ引返
さり此武雪殿帰国の支度実
に古代未聞なり法人薩摩の
武士城を忍ひ元こくりなり
さて義弘帰国ハ薩摩
大隅の両国を出て武雪
をまもりたり

弟狭如殿病の為
并伯和山義城人同東雲寺家
配の為

佐京立花左近将監宗茂の立花
の陣なりや義狭如殿を討果
さべしさて京都弱の小路
に陣取り陣屋をもうけて中人

りるいろのうびゐ関ケ原れいくさ
いは合戦金吾度のうち切り依
く実来ぐ稼利すり定めて
出潜見るべし強れば大坂乃
ゆうろうりく形くは条口同度
仕りて義博と云べきすり
きやく乃城あれとりて
送る美狭少将ゆう元来狂病の

人を伏見を迎より出る人
すりうりく大きゆ強ぎ
樓裏へ走り迎ゆ公家堂上方
ゆ高ぶ出る西へ行ゆ
ゆ振ゆ下ゆ拘せ弓法弾
して見ぐ山の長嘯子と云
しそされば少将ゆ樓裏に
新迎ゆ陽ゆ歩く立花い

大きに怒るとい
へ共流石に
柿屋表に狼藉
する事を
ざるまへ共
大坂に立廻り
藤堂せんかを初め
諸侯皆
を以て
共怒恨のあまりて
一万石を立花
鍋藩と称して
毒殺お清の上
長崎柳川に
改藩しいまく

武雪をたげ
げを援加藤
初め同じて
内府公御
奥別格
武雪毒
慶長十二年
援の国柳
橋
藩
を
援加藤清正
上洛
一万石
鍋
藩
ふ
本領
城
を
鍋

より今こゝ御陣を取り敵を討
文年九月十七日信州小山城攻
落さるべしとて手勢ありける追
手の大将秀秋一万五千余人
なりしに小川祐忠朽木稙綱赤
松広家吉川広家小早川
手勢の内中村式部少輔吉政
その外諸大名ゝ信州

山の城を攻落さる陣を
内府公の御本陣と長根の御
平山に御陣と長谷の幕
所せらる実や晴ケ原ハ
城責なりしに又前代未聞の
ものなりいかゝ城を一揉
にせんとまやうの見
く信州小山の城手の内実ケ原

ちゝ味ふ級軍と呼て徒
人大ひ手ちゝと所を拾る
手上四東寄寄の青糧乃良
古之徒軍をいきわ石国度礫
級軍ゝとも其軍無き南城へ
来るべしいそ紀国を見べ手
なりそてきび逃ひちく
軍名一子余人を引率し

十八日代表より十六日代書ゝ
きゝく城郭へ出く拾不く
左き形くして
内府公教万代大軍之寄せ
ゝとも重要秀秋 田中吉政
黄瓶のよし風吹ちゝ手
ちゝく今わゝやのゝれぎる
ちゝちゝとゝ思ひくいそ紀

東雲寺ゟ籠城の手配り
城内ゟ加藤右馬丞殿
彼者共に三加ゟ父子ゟ続ひて
宇田下総守ゟ三加ゟ婿ゟ
石田年人ゟ三加ゟ婿ゟ
和形ゟ三加ゟ兄弟
同ゟ右近年人ゟ
宇田勘解由殿下総守ゟ

如斯ゟ余人ゟ二の丸内中
年ゟ石田豊前守ゟ
川瀬左ゟ和泉守ゟ
ゟ退ゟ此方ゟ百人
年人形部ゟ尾張ゟ山田
東雲左ゟ
東雲寺ゟ余人又ゟ
下知ゟて籠城せり年来

石田治部少輔が用意しける
手負人城内に籠置きて
兵粮米蓄り武具とも沢山
好りたれども寄手
城内のどもの
陣ぶれに出陣して居る
ものども多く討人まるい
病人あるひは義手りの板ち

池清

結役人斗りこ

池清

関ヶ原軍記二編巻の十四終

池清